

思い出の一頁

三宅 忠 篤(全農OB)

私の誕生の地は、時は昭和20年1月13日、宮城県玉造郡川渡村に於いて産声をあげたのである。

私の父が職業軍人であり陸軍獣医学校へ勤務しており、戦局も厳しさを増してきた為に陸軍獣医学校がかの地へ疎開していたのであります。当時、父は東京と宮城を往復する状況であつたらしい。

終戦後、父は公職追放となり23年に父の故郷である岡山県川上郡大賀村へ帰郷する事となり、一家6人（父・母・姉6才・姉4才・自分3才・妹1才）で引っ越すことは戦後の混乱期に想像を絶するものがあつたようですが、幼少の私には全くその記憶はありません。しかし、帰郷に際して二人の人が同行して子供達の世話をしてくれたそうで、この二人は父・母が仲人を務めた地元の若夫婦であつたことも後に聞かされておりました。

帰郷後の私は15歳までおおいなる自然と動物園さながらの家畜達（馬・牛・山羊・羊・兎・鶏・猫）と共に地元のガキ大将として過ごしてまいりました。

私が、小学校へ入学の年26年より父は地元の農協へ勤務するようになり、我が家の農業の主役が母となり大変な状況が発生したので。母は農業の経験は全くなく、田舎暮らしも未経験であつたからです。

そのようなことから吾々姉弟は、農業の手伝いをせずに居られない環境と成つた次第です。

当時は、我が家の地域では主な農作業は集落での共同作業になっており、近所の小父さん、小母さん達と一緒に野良仕事をするのが大変であり、また一面では楽しみで有つた事を思い出しております。

我が家の周辺は、中山間の畑作地帯であり当時の主要な作目は、煙草が唯一の現金収入作目であり、裏作に大根・白菜等を作付けしておりました。葉煙草の栽培は、冬場の落ち葉集めから秋の収納（専売品であるため売り渡し）まで一年中関連の作業が必要であつた。苗床作り、初夏の芽かぎ、葉煙草収穫、乾燥、調理（選別、調整）、収納に至るまで思いで深い共同作業が走馬燈のように思い起こされます。特に、乾燥作業は数々の事柄が思い起こされます。葉煙草を火力乾燥するために、我が家では蔵を乾燥小屋に改造して使用しておりました。収穫した葉煙草を縄に一枚ずつ、葉茎部分を挟み一連状態にして乾燥小屋に吊してゆくの。上部から順次吊るすために竹竿に一連ずつ挟み持ち上げるのですが、この仕事はタイミングのいる仕事でありました。吊り込みが終わると徹夜で薪を釜で焚き葉煙草を乾燥させるのです。

当時の乾燥小屋の構造は、小屋の地面に煙突を這わせ四方は土壁で室内の温度を上げて乾燥さすようになっておりました。

乾燥室内の温度調整は、室内の中央に寒暖計を吊しておき、釜の焚口近くに小窓を設けて寒暖計を引き寄せて室内温度を確認し、薪の釜への入れ具合や地窓・天窓の開閉を調整しながらやっておりました。夜通しで、釜の火を管理するので近所の小父さん達から釜の火を管理する傍ら、昔話や世間話を聞くのが楽しみでもありました。

昭和29年に我が家に一大変化が起きたのです。現金収入の無い地域で有りましたので、なんとか現金収入の得られる作目はないものかと、父が岩手県へ妊娠牛の購買に出かけて乳牛を導入したのが地域での酪農の始まりで

あり、この時、引き取り手の無い導入牛が我が家にやってきたのが、我が家での酪農の始まりだったのです。

爾来、2～3頭搾乳の極々小規模な酪農が続くこととなり、必然的に酪農の手伝いをすることに成ったのです。特に、搾乳作業は大変な思い出が有ります。最初に我が家にやって来た牛は足を振る癖のある牛で、一本足の椅子に腰掛け搾乳バケツを両足に挟み搾乳をするのですが、搾乳バケツに牛乳も溜まりそろそろ終わりかなと思う頃、牛が足を振りバケツ共々ひっくり返されるのです。せっかく搾った牛乳は牛舎の床へ流れてしまうのです。この時の残念な気持ちは今でもはっきりと思い起こされるのです。

このようにして、中学卒業までを田舎で過ごした私は県立高松農業高等学校、麻布獣医科大学へと進んだ後、薬品会社（ヘキストジャパン）へ就職し奈良・大阪・和歌山に於いて人体薬の営業を担当し、昭和52年にUターンするまでの17年間田舎を離れた生活と成った次第です。

帰郷後は、岡山県経済農業協同組合連合会高梁主幹支所畜産課を振り出しに28年間農協人として、数多くの人達のご指導ご鞭撻を得て大過なく過ごすこと出来、平成17年2月末めでたく定年退職を迎えることが出来ました。

定年退職を迎えるに当たり、子供達がこの年の正月に還暦と定年退職の祝いの宴を開催してくれ、夫婦での旅行をプレゼントしてくれたのです。

さて、どこへ旅するか思案した結果、自分の生まれ故郷を訪れた事の無い事に気づき、かの地、宮城県玉造郡鳴子町川渡へ旅することとして、準備を進め退職の翌月3月末に、一週間の本当に感慨深い旅をすることが出来ました。

この旅での、一番の感動は、57年前に宮城からの帰郷に際して二人の若夫婦が同行して

世話をしてくださった事を聞かされていたと記しましたが、この人に会って御礼をしようと連絡を取りましたが、残念なことに、当時の若夫婦と言っても、父母と同世代の人であり、ご主人は亡くなっており、老母のみでありました。

私たちが訪問する日、老母は朝から駅へ電車が着くたびに迎えに出ていたとのことでありました。私達は仙台でレンタカーを借りての旅でしたので、近くへ着いたら連絡をするからと話しておいたのですが、電車での訪問だと思いこんでいたようです。

老母の自宅へ岩出山町の道の駅から電話を入れると、この道の駅のすぐ近くに住んでいるとの事で、その場で待っている様に言われ待っていると、一人の老母がやってきたのですが、お互い一目で判りあう事が出来て、全くの見も知らずの状況なのに、不思議な古を感じた次第です。

お逢いする事が出来て息子が帰ってきたと大変な喜びようで、私達の方が面食らって驚く有様でした。

老母の案内で、当時の陸軍獣医学校跡地、現在は東北大学付属農場と成っております農場内を案内してもらった際、吾々が生活した官舎はすでに跡形も無い状況となっておりますが、官舎の建っていた場所で、事細かに当時の家の間取りやら、当時の生活状況を老母が説明して下さり、誕生の地へ立てた事とともに60年の歳月が一瞬のうちにタイムスリップした思いがしたことが今でも思い出されます。

爾来、老母とは連絡をとりあい、毎年我が家には、仙台のササニシキが届くようになり、この米を食する度に我が誕生の地、宮城に思いを馳せるとともに、また、老母の健康で末永いそくさいを願うばかりです。

とりとめも無い話に成りましたが、我が思い出の一頁を記し失礼します。